シャイネスとコミュニケーションに対する抵抗との関連
―発信手段と話題の条件を考慮して―

専　攻	学校教育専攻
コース	教育コミュニケーション
学籍番号	M100006G
氏　名	鈴木真奈

【本研究の目的】

この研究では、シャイネスと自己開示の関連について扱った。その際に、シャイネスとコミュニケーション手段に対する抵抗との関連について、発信手段と話題の条件を考慮して検討を行った。風間（2009）の研究を参考に、シャイネスと「対面」「電話」「メール」のそれぞれの発信手段で話したときの抵抗を話題ごとに比較し、検討した。話題については、肯定的、中性的、否定的内容の３つの話題を扱うこととした。話題は「すごく落ち込むことや真剣な話」「用件もなく他愛もない話」「楽しかったことや嬉しかったこと」の３つである。

開示相手には、シャイネスを喚起しやすい「今後親しくなりたい人」と、シャイな人でも比較的話しやすいと考えられる「カウンセラーなどの専門家」の二つの場面を設定した。

調査結果から、シャイネスが高い人やシャイネスが高まる状況において、話したくても話すことができない人が少しでも話しやすくなるために、どのようなサポートが必要か考察することを目的として研究を行った。

【調査】

（１）調査時期：2011 年 7 月下旬～9 月下旬

（２）調査対象：大学・大学院、短期大学、専門学校生 264 名(男性 137 名,女性 127 名)記入漏れ等を除く 259 名。平均年齢（22.93 歳）

（３）調査手続き：個別に調査協力者を募り、返信用封筒を同封し、回答を回収した。

（４） 調査内容：質問紙の構成

早稲田シャイネス尺度、普段の発信手段の選好性について、話題ごとの発信手段に対する抵抗度についてであった。

発信する相手としては「今後親しくなりたい人」と「カウンセラーなどの専門家」を想定した。また、発信手段については、「対面」「電話」「メール」を用いて話す時について尋ねた。

「今後親しくなりたい人」については、「肯定的な話」「中性的な話」「否定的な話」についてそれぞれの手段を用いて話す時の抵抗度について尋ねた。また、「カウンセラーなどの専門家」には、特に話題を設けず、発信手段に対する抵抗度を尋ねた。

そして、それぞれの相手の性別（男性・女性）と、年齢（年下・同年代・年上）に当てはまるものを選択させた。

【結果と考察】特性シャイネス尺度因子分析

早稲田シャイネス尺度については因子分析の結果から、行動、認知、感情の３因子を抽出した。

シャイネスとコミュニケーションとの関連

（１）普段のコミュニケーション場面について

シャイネスと普段の各発信手段の使用頻度との関係について検討した。その結果、特に行動因子と全ての手段に対する使用頻度との間で有意な負の相関が認められた。また、認知、感情因子との相関は有意ではなかった。

さらに、シャイネス高群・低群の比較から、「対面」「電話」「メール」全ての手段で、低群よりも高群において有意に抵抗度の平均値が高かった。これらのことから、対人関係において行動面で消極的になってしまう人ほど自分のことを話していない、話したがらない、あるいは、話さない傾向があることが考えられた。

（２）シャイネス喚起場面について

「今後親しくなりたい人」に各発信手段を用いて話すときの抵抗度とシャイネスとの関係を話題により比較した。その結果、否定的な話をするときについては有意な相関は認められなかった。中性的な話をするときについては、行動因子と「対面」「電話」「メール」を用いて話すときの抵抗との間に有意な正の相関が認められた。感情、認知因子と抵抗との相関は有意ではなかった。肯定的な話を「対面」「電話」「メール」を用いて話すときの抵抗との間で、行動、認知因子に有意な正の相関が認められた。感情因子と「メール」を用いて話すときの抵抗との間には有意な相関は認められなかった。シャイネス高群・低群による比較から、肯定的な話のとき、全ての手段で有意差が認められた。そして、低群よりも高群において抵抗度の平均値が有意に高かった。以上のことから、シャイな人ほど、発信手段に関わらず肯定的な話をすることに抵抗を感じることが考えられた。また、この傾向は特に女性でみられる事が示唆された。

（３）話しやすい場面について

「カウンセラーなどの専門家」に「対面」「電話」「メール」を用いて話すときの抵抗度とシャイネスとの関係を調べた。その結果、認知因子と「対面」で話すことへの抵抗との相関が有意に認められた。行動、感情因子と「対面」「電話」「メール」を用いて話すときの抵抗の相関は有意ではなかった。さらに、シャイネス高群、低群の比較を行ったところ、相関と同様の結果が確認された。

話題と各発信手段に対する抵抗との関連

（１）「今後親しくなりたい人」について

話題と発信手段の交互作用が 5%水準で認められた。単純主効果の検定を行ったところ、話題と発信手段のどちらも主効果も有意であった。「対面」「電話」「メール」いずれの手段においても否定的な話をするときにもっとも抵抗を感じることがわかった。また、発信手段については、否定的な話では「メール」、肯定的、中性的な話では「電話」がもっとも抵抗のある手段となった。

（２）カウンセラーなどの専門家について

分散分析の結果、抵抗に対する手段の多重比の結果、主効果が認められた。そして「対面」「電話」「メール」という順に抵抗が大きくなることが示された。(1)(2)の結果から、相手に関わらず「対面」の時もっとも抵抗が小さくなることがわかった。

【総合考察】本研究の結果から「今後親しくなりたい人」に話すとき、シャイネスが高い人ほど、手段に関わらず「肯定的な話」をすることに抵抗を感じることが示唆された。したがって、シャイネスが高い人は、否定的な話だけでなく、肯定的な話をするときでさえも抵抗を感じることが示唆された。以上のことから、肯定的な話をすることに抵抗を感じる人々の存在が考えられた。そのことから、否定的な話にのみ焦点をあてるのではなく、そのような日々の何気ない話題に注目して研究を行う必要があると考えられる。また、相談機関などによる心理的援助場面でのサポートについても更なる検討が望まれるだろう。

主任指導教員　中間玲子
指導教員　中間玲子